

第2章 家畜化の定義と動物飼養の多様性

本研究で取り上げるイヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマはいずれも、発達した海獣狩猟文化として知られるオホーツク文化において、これまでに飼養の可能性が指摘されたことのある動物である。ただし、これらが一様の飼養内容や価値を有していなかったであろうことは、それぞれの動物種が本来持つ形態や生態、性質の多様性からして明らかである。オホーツク文化については、海洋適応に関わる海を舞台とした生業活動やそれに用いられた道具類の検討を中心に研究が進められたため、動物飼養についての実証的な把握や位置づけを目指した試みは、数編の論考(菊池 1976、梶本 1978、1986、内山 2000、2002a、b、2003a)を除いて乏しい。本研究では、近年、資料が増加しているこれら4種の動物利用について、考古資料に基づいた実証的復元を試み、飼養の可能性について検討を加えることとする。その上で、飼養されたとみなせる種についてはさらに、その内容の把握と文化内における位置づけを図りたいと考えている。そのため、本章ではまず、動物学や文化人類学などで主に検討されてきた家畜化の定義や動物に対する人間側の介入、それによって惹き起こされる動物側の変化について概観し、これらの研究成果に基づいて提出された考古資料に見出される家畜化の傍証について、問題点の指摘を行う。さらに、多様にある動物飼養の諸段階を整理し、狩猟から動物飼養までを包括した人間と動物との相互関係を図る上での新たな指標を提示することとする。

第1節 家畜化の定義

動物の家畜化に関しては、植物の栽培化とともに、長い研究の歴史がある。これは、人間にとって動物との関わりが非常に深く、かつ多様であることに起因しよう。実際、人間はヒト化する以前から、食物連鎖体系の中で他の動物と「食う・食われる」という緊密な関係を長期にわたり維持してきたといわれる。「食われる」という側面は防衛戦略の発達とともに希薄になったが、その代わり、ある段階で「食」を生存のためだけでなく文化として社会の中に位置づけたことで、その関係は一層多様化していくこととなる。本研究で取り上げる動物の家畜化はもちろん、近・現代における加速度的な絶滅種の増加や未受精卵からのクローン動物の作出なども全て、これまでに人間が営んできた動物との相互関係史上に位置づけられる事象である。

動物学では、家畜について、「生殖 (reproduction) がヒトの管理 (control) のもとにある動物」(野澤・西田 1981: 3~4 頁)と定義されている。このような生殖管理下で進められる家畜化 (domestication) とは、それまでに動物が受けてきた自然淘汰の圧力が人為淘汰の圧力に徐々に置き換えられていく過程であり、これによって、動物の側には、形態や

生態、性質に「遺伝質の変化」(野澤・西田前掲書：4頁)が起き、人間の側には、「一つの文化として子孫の世代に伝承されていく、ものの考え方や生活形態、技術といったものを含んだ現象や行為」(野澤・西田前掲書：4頁)と理解される。上記の定義に基づけば、現代においても真に家畜と位置づけられるものは少なく、人間のもっとも近くで飼われ、過剰なまでの人為的介入を受けているイヌやネコでさえ、厳密に生殖が管理され再野生化不能な個体以外は、この概念から外れることになる。一方、北歐のラップに飼養されるトナカイのように、形態的には野生動物とほとんど差異がなくとも、通常の狩猟とは異なる意識や人為的介入がなされているものも純粋な野生動物とは言えず、家畜化の過程にあるとみなし得る(註1)。このように、純粋な野生動物が真の家畜になるまでの過程には、無数の中間形態が想定し得ることになり、野生動物／家畜、という二項対立的な分類が実際的には成り立ち得ないことは明白である。松井健氏(1989、1997)は、この無数の中間形態を包括して、動物と植物とに共通する「セミ・ドメスティケーション」の概念を設定した。このように無数にある家畜化過程の諸段階について、ゾイナー氏(1983〔1963〕：58頁)は以下のように簡略に提示している。

- (a) 自由な繁殖を伴った拘束性のない接触
- (b) 囲いの中での繁殖と、人間環境への拘束
- (c) 一定の動物の形質を得るために、人間が組織した選択的飼育と折々の野生種との交配
- (d) 一定の好ましい特性を持った品種を計画的に発達させる人間の経済的配慮
- (e) 野生原種の虐待と絶滅

このような家畜化の諸段階は、松井氏(1989)の指摘するように、必ずしも家畜へと発展的に解消されなくてもよいとされる。事実、古代エジプト王朝では、さまざまな動物に対して家畜化が試みられたが、その多くが家畜としては放棄され、家畜化の痕跡すらとどめない野生動物として今に至っていることはよく知られている(野澤・西田1981)。このように、家畜化過程とは、対象となる動物の特性や用途、生態的環境や社会背景などによって、多様な道筋をたどるものとみられる。さらに、ライオンやヒョウなどがステイタス・シンボルとして家畜化された例からすれば、家畜化が経済的な合理主義のみに裏打ちされたものばかりでないことも明らかである。

なお、本研究では、無数にある家畜化過程の中で、厳密な生殖管理がなされているとみなし得るものを「家畜」と称し、家畜化の過程にあるが生殖管理の有無や程度の判別できないものについては、より広義の概念として「飼養動物」という用語を用いることとする。

家畜化の萌芽は、人間の排泄物や食料残滓を求めた動物側からの接近や、人間による群棲動物群への追跡を契機とした可能性が指摘されている(ローレンツ1966〔1953〕、今西1974〔1948〕)。このような狩猟採集段階での無意識的で単発的なセミ・ドメスティケーションのプレ段階が意識的で持続的な段階へと変容を遂げるまでには長い年月を要したとみられるが、家畜化の証拠が考古資料に残されるようになった1万年程前からは、いわば革新的に家畜化が進み、狩猟民の急激な減少を招いたことが知られる(Murdock1968)(註2)。

ただし、一見安定的に見える家畜化の段階にあっても、動物の側からすれば、人間の手を離れることによって再野生化する可能性は高く、可逆的な側面が強いとされる。その一方で、家畜化があるレベル以上の効率と安定性を生み出すようになった後に再び狩猟採集段階へと指向した事例は少なく（フィリップ 1986 [1970]）、人間の側からすれば、不可逆性が強いとみなせる。このように、家畜化の問題については、人間と動物双方の側からの検討が必要であるといえるだろう。

人類史上、多様な過程を経て家畜化された動物種の数は、狩猟対象獣として対峙した動物種の数に比べてはるかに少ない（ゾイナー 1983 [1963]、谷 1995、1997）。これは、家畜化される動物種の選択に際して、その動物が人間にとって何らかの点で有益であるという必要条件に加え、食性の広さや制御し易さという諸条件が付加されるためであり、社会行動の構造が人間に似た群居性で社会性の強い動物が選択される傾向が強い。このような動物に本来的に備わった特性は人間の管理下に置かれても完全に失われることはないため、選択された種に応じて、飼養内容や用途、価値などが異なることは当然の結果といえよう。事実、ユーラシア大陸の西と東とでは、主要な家畜種が前者の「ヒツジ・ヤギ」に対して、後者では「ブタ・イヌ」と異なることが知られており（註 3）、この違いが両地域間の動物飼養文化に大きな差異を生じさせていることはすでに指摘される場所である。動物飼養文化に関しては、文化人類学や民族学、考古学などの多岐にわたる分野で研究がなされてきたが、いずれの分野においても、主要な対象地域は「ヒツジ・ヤギ」を飼養した西アジアであることが多い。そのため、本研究のように「ヒツジ・ヤギ飼養文化圏」から外れ、自然環境や文化背景も大きく異なる北東アジア沿岸での動物飼養を研究対象とするにあたっては、先行研究や民族事例の援用に細心の注意を払う必要がある。

第2節 飼養動物の名称

動物は生殖が人間の管理下に置かれることによって、遺伝質の変化を起こす場合があることを前節で述べた。ただし、家畜化によって種分化が起きるわけではないため、たとえ家畜化が進んでも、野生種との交配は可能で、妊性のある仔を持つことができる。そのため、本来ならば、両者には同一の種として同名の学名が与えられるべきであるが、野生種が命名の際に明らかでなかった際には、異名となった場合もある。学名は命名規約により原則として変更や訂正ができないものと定められているため（平嶋 2002）、野生種と家畜種の学名には、現在、同名のものもあれば、異名のものもあるという混乱が生じている。これは和名についても同様である。

本研究で取り上げる動物種のうち、トナカイ (*Rangifer tarandus*) とヒグマ (*Ursus arctos*) は、飼養の有無に関わらず、学名、和名ともに共通する名称を有しているため、本研究ではその名称を用いる。一方、オオカミ (*Canis lupus*) から家畜化されたとみられる

イヌ (*Canis familiaris*) では、学名、和名ともに異なる名称が付けられている。イヌの分化については、古ミトコンドリア DNA (古 mtDNA) の解析によって、東アジアで 1 万 5 千年前まで遡るとの論考 (Peter et al. 2002) や、塩基配列に見られる変異幅が生じるためには 13 万 5 千年を要するとの推定結果の提示がある (Vila et al. 1999)。さらに、考古資料で迎れるイヌの家畜化の証拠は、少なくとも 1 万数千年前から見られるといい (クラットン・ブロック 1989 [1981])、古 mtDNA の解析でも、1 万 2 千～1 万 4 千年前には、旧大陸から新大陸へとイヌが人間とともに移動した可能性が指摘されている (Leonard et al. 2002)。このように、イヌの分化と家畜化はかなり古くまで遡ることが明らかであるため、本研究では、オオカミの範疇に含まれるイヌ属の特大個体以外を検討対象に含めることとした。ただし、この中には、再野生化した個体やオオカミとの交配により生まれた個体が混在する可能性があることも留意しなければならない。イノシシ (*Sus scrofa*) とそれを家畜化したブタ (*Sus scrofa*) では、学名は共通するが、和名は異なる。この種では、各地に生息する形質の異なる野生種と家畜種との交配が頻繁に行われたとみられるため、形態からの区別は容易でないとされる。加えて、ブタ (豚) という和名には、現代のヨークシャー品種に代表されるような高次に家畜化の進んだ動物という印象が強いことを考慮すると、飼養の有無やその程度について検討する前にこの和名を用いることは不適當といえよう。そのため、本研究では、「イノシシ類」という名称を用いることとする。

第 3 節 飼養動物の利用

動物の利用は、「殺すこと」を伴うものと伴わないものとに大別される (表 2)。本研究で扱うイヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマに限って言えば、前者 (I 群) には、殺すことで得られる a. 食料資源 (肉・脂肪・内臓・脳・骨髄・血・袋角) や b. 道具素材 (毛皮・骨・角・歯・腱)、c. 燃料素材 (脂肪・骨髄) の他、d. 儀礼の一翼を担う、という役割があり、後者 (II 群) には、殺さなくとも得られる a. 食料資源 (乳・袋角) や b. 道具素材 (角(落角を含む)) の供給源としての役割と、c. 使役 (猟の補助・見張り・運搬・騎乗) や d. 愛玩対象、という役割が含まれる。このような用途は動物の本来の特性に応じて概ね割り当てられているが、決して固定的ではなく、同一種や同一個体が複数の役割を担うこともある。使役用の動物 (II - c) を例にとると、使役内容に適した体躯や指示に対する従順な性質が好まれ、性別特性はあまり関与しないとみられる。また、訓練を要する使役の場合には、ある程度の熟練を要するために、成長した個体が多く用いられる傾向にある。使役内容に不適格とみなされた体躯や性質を有した個体に対しては、未成熟の段階で間引きや去勢が実施されることもある。さらに、怪我や病気により役割が果たせなくなった際には、屠殺されて死後の体が利用されることが多いとみられるが (I - a, b, c, d への転化)、縄文時代のイヌのように、2 次的な利用がなされないまま埋葬されたとみられる例も

ある。一方、食肉用の動物（I - a）では、人間が給餌している場合、増体率が飼料効率を下回る直前段階が最適な利用時期であり、仔を産み、乳を出す雌よりは雄のほうが未成熟の段階で多く利用されやすい。また、去勢を実施することによって、性質を穏やかにさせるだけでなく、肉を柔らかくする効果も期待できる。以上のように、飼養動物には、動物種や個体に本来的に備わった特性や与えられた用途に応じた人間側からの多様な介入が見て取れる。

表2 動物の利用内容（主要なもの）

I 殺すことを伴う		【飼養動物】	【野生動物】
(a) 食用資源	(肉/脂肪/内臓/脳/骨髄/血) …イヌ・イノシシ類・トナカイ・ヒグマ (袋角) ……………トナカイ		⇔ 海獣・陸獣
(b) 道具素材 (毛皮/骨/歯/腱)	…イヌ・イノシシ類・トナカイ・ヒグマ (角) ……………トナカイ		⇔ 海獣・陸獣 ⇔ エゾシカ
(c) 燃料素材 (脂肪/骨髄)	…………イヌ・イノシシ類・トナカイ・ヒグマ		⇔ 海獣・陸獣
(d) 儀礼・供儀	…………イヌ・イノシシ類・トナカイ・ヒグマ		⇔ 海獣・陸獣
II 殺すことを伴わない			
(a) 食用資源 (乳/袋角)	…………トナカイ		
(b) 道具素材 (角(落角含む))	…トナカイ		⇔ エゾシカ
(c) 使役 (狩猟の補助/見張り)	…イヌ (運搬) ……………イヌ・トナカイ (騎乗) ……………トナカイ		
(d) 愛玩	…………イヌ イノシシ類・トナカイ・ヒグマ (幼獣)		

第4節 人間側の介入による動物側の変化

人間は動物を自らにとってより有益なものとするために、無意識的・意識的な介入を続けてきた。その結果、196もの認定品種 (breed) (註4) を持つイヌに代表されるように、飼養動物の形態や生態、性質には用途に応じた多様な変化が生じることになった。この節では、家畜化による動物側の主要な変化について概観する。

(1) 形態変化

家畜化の初期には、動物のサイズは一般に小型化するといわれる。これは、限定された人的環境下による栄養条件の低下 (Widdowson and MacCance1975) や生殖戦略の変更 (Tchernov and Horwitz1991) (註5) を反映したものである。その後のサイズや形態は、人間側の意図的な介入によって多方面に変化する。ローマ帝国時代の Tác 村 (註6) で飼養されたイヌには、すでに5~6つの品種のあったことが骨の形態学的検討から明らかとなっ

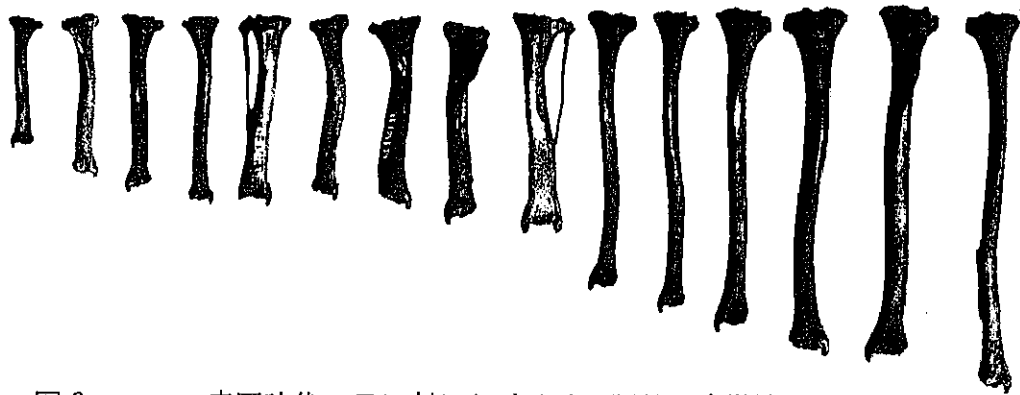


図6 ローマ帝国時代の Tlac 村におけるイヌ脛骨の多様性 (Bökönyi1974)

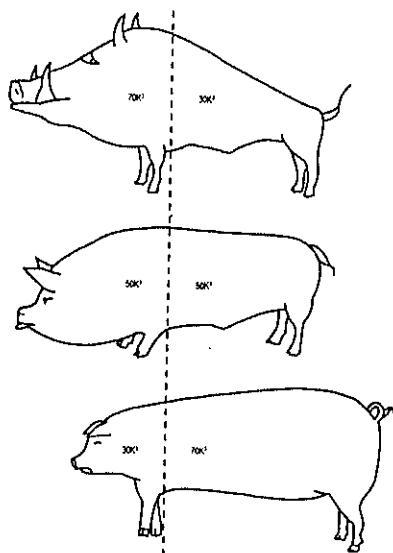


図7 ブタの改良目標を示すポスター (正田 1997) K³は体積割合(%)を示す

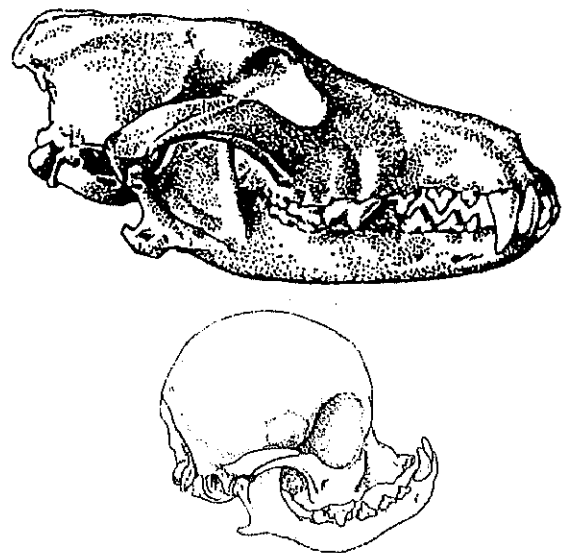


図8 短頭化現象(縮尺不同)

上: インドオオカミ (ゾイナー1983 (1963))

下: ペキニーズ(クラットン・ブロック 1989(1981))

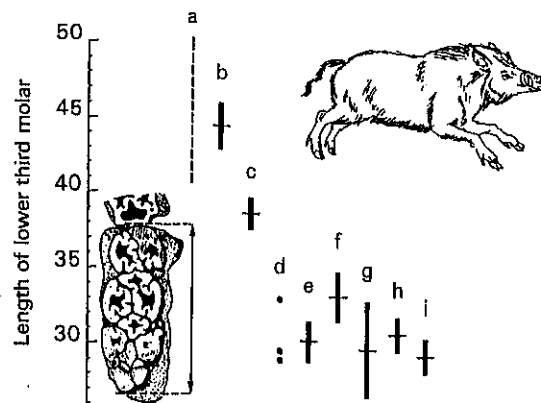


図9 下顎第3後臼歯の大きさ変化 (Davis1987)

a,b: 更新世末期の野生イノシシ c: 現代の野生イノシシ d-i: ブタ

ている (Bökönyi1974) (図 6)。さらに、イノシシ類では、より多くの肉や脂肪の採取を目的として飼養が進められたため、図 7 に示すような極端な改良目標 (正田 1987、1997) が掲げられるまでになっている。また、家畜化による自己防衛力や採餌力の低下は、角や牙の矮小化、頭部 (頭蓋骨・下顎骨) の短縮 (図 8)、それに伴う歯列や歯の短縮 (図 9)・消失を引き起こし (野澤・西田 1981、ゾイナー1983 [1963]、Davis1987)、さらに、野生イノシシの幼獣にとって保護色であった縞模様が家畜化の進んだブタでは失われるという現象を招いた (正田 1987)。この他にも、染色体数や毛、骨質、筋・腱などに変化が認められることが報告されている (野澤・西田 1981)。

(2) 生態変化

人間の管理下に置かれた動物では、概して野生の状態に比べて採餌条件が改善されて高栄養となるため、成長が促進され、性成熟に達する時期が早まるとともに、繁殖率が上昇するという (野澤・西田 1981)。イノシシ類を例にとると、野生イノシシが生後 2 年目になってはじめて繁殖し、1 年 1 産で 5 頭前後の仔を産むのに対して、家畜ブタでは生後 4~5 ヶ月頃から発情が始まり、周年繁殖が可能であるために、1 年に 2~2.5 回の分娩により 20~30 頭もの仔が産まれる (田中 2001)。イノシシ類では、歯の萌出や四肢骨の骨端融合の時期についても、野生イノシシより家畜ブタの方が早いという分析結果が得られている (Hayashi et al.1977、Bull and Payne 1982)。

(3) 性質変化

飼養動物では、一般に飼養し易さが好まれるために、人に馴れる性質が野生段階に比べて強化される傾向にある。また、飼養されたオオカミが主人に対して「リーダー」としての愛着を抱くのに対して、家畜化が進んだイヌでは「母親」に対するような愛着を主人に抱くという (ローレンツ 1987 [1983])。

以上、家畜化によって形態、生態、性質上に見出される主要な変化について概観したが、このうちの一部は、野生動物の幼獣に通じる特性であり、このような幼化現象は幼形成熟と呼ばれる (猪熊 2001)。

第 5 節 家畜化の傍証となる考古資料

家畜化の問題は、人類史上における重要な検討課題の一つとみなされ、考古学においても、これまでに数多くの関連書籍や論考が提出されてきた (註 7)。これらの中で挙げられた家畜化の傍証はいずれも、前節までに概観した動物学や文化人類学などで検討されてきた動物飼養に伴う文化事象や生物学的変化のうち、考古資料として遺存する可能性のあるものが取り上げられている。主要な項目を、以下に列挙する。

- (a) 自然分布域外の遺跡から出土する。
- (b) 野生動物に比べて、形態・サイズが変化する
- (c) 前後の時代で動物相に著しい変化が生じ、新しい時代で現在の家畜種の割合が高まる
- (d) 狩猟された野生動物とは異なる性比を示す
- (e) 狩猟された野生動物とは異なる年齢構成比を示す
- (f) 埋葬や殉葬などの特異な出土状況を示す
- (g) 拘束や騎乗されている様子など、家畜化されたことを示す動物意匠遺物が認められる
- (h) 飼養に関連した道具類が出土する
- (i) 飼養に関連した遺構が検出される

これらのうち、(a)～(f)は出土した動物遺存体の分析結果に基づく項目であるため、動物遺存体が残存していない遺跡では、検討自体が不可能となる。また、(g)～(i)についても、材質が木や骨、角などの有機質である場合には遺存率が低く、検討できる事例に限られる。このような資料の遺存率の問題に加え、(b)、(d)、(e)では、家畜化される以前の野生個体群の形態的特徴や利用内容の把握を前提とし、さらに(c)では、同一遺跡内もしくは同一地域圏内で、動物遺存体の包含層が複数堆積していることを前提とするなど、条件が整い難い項目もみられる。なお、縄文時代の野生ニホンジカ (*Cervus nippon*) が現代に比べてはるかに大きく、野生エゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*) 程度の大きさがあるという事例からも明らかのように、(b)の形態・サイズ変化は、家畜化のみによって引き起こされるものではない。また、(d)では、一部の部位を除いて性の判別が困難な上に、選択狩猟により獲得された野生動物でも類似した性比を示すことがあるため、注意を要する。さらに、(d)と(e)の性比や年齢構成比は、第3節で示したように、使途に応じて多様に変容することを考慮しなければならない。また、(f)と(g)は、対象となる動物の価値や人間との精神的距離を示す指標として注目されるが、(f)に関しては、北方ツングースのエベンキが野生オオカミを埋葬する事例が知られるように(トゥゴルコフ 1981〔1969〕)、この項目のみをもって、飼養動物と断定することはできない。さらに(g)では、表現された動物について形態的に近似する野生動物と飼養動物との判別には苦慮することが予想されるが、係留用の紐や利用方法などの表現が加えられていれば、飼養方法や飼養目的の一端を知るための材料にも供し得る。(h)では、動物飼養という生業が、概ね物を介さない「コミュニケーションなレベルでの働きかけ」(谷 1995: 233 頁)であることから、検討資料自体が少ないことが予想される。さらに(i)では、飼養のための遺構であるとの認定が困難であるといった問題を含む。

以上のように、家畜化の傍証とされるいずれの項目も絶対条件とはならず、多数の問題を包含した「間接的な状況証拠にとどまる」(谷 1997: 8 頁)。そのため、対象動物が家畜化過程にあるとみなすためには、上記の項目についての総合的な検討を進め、複数の項目で合致する傾向を見出すことによって、その妥当性をより高めていかなければならない。さらに、このような種別の検討を基礎とし、人間と動物との相互関係についての全体像を

把握することが、この問題を解く上での重要な鍵となろう。なお、上記に示した項目以外にも、近年では、古 mtDNA 分析（小澤 2000、渡部他 2003）（註 8）や、炭素・窒素の安定同位体分析（松井他 2001）（註 9）などの化学分析に基づいて、動物飼養の存在を証明しようとする試みがなされるようになってきている。ただし、これらの方法には、註 8、9 に示した前提条件の問題に加え、分析に際して資料の破壊を伴うことや費用の問題などがあり、現在のところ、限られた資料に対して試みられるにとどまっている。

第 6 節 人間と動物との相互関係に見る多様性

人間と動物との相互関係がきわめて多様なあり方を示すことについては、本章中でも繰り返し述べてきた。この「多様性」という両者の関係性に見る特徴を加味した点では、第 1 節で取り上げたゾイナー氏(1983) [1963]による家畜化過程の諸段階の提示は評価できる。ただし、すでに確認したように、家畜化過程が対象動物の本来の特性や用途などに応じて多様な道筋をたどることからすれば、ゾイナー氏の諸段階に該当しない事例が数多く存在することは明らかである。特に、同氏の示す諸段階のうち、(b)以降は全て、比較的高次に家畜化の進んだ様相を示しており、「選択的飼育」や「野生種との交配」のように、考古資料からは程度の把握が困難な項目も多い。そのため本節では、狩猟段階を含めた人間と動物との相互関係について、新たな指標の提示を試みることにする。

新たな指標を提示するにあたって注目したのは、(1)対象動物の文化内での位置づけを資源 (resource) から資本 (capital) (Payne1971) (註 10) へと根本的に転換させる「複数世代にわたる所有意識」(註 11) と、(2)人間による動物への多様な介入を可能にさせ、動物側に生物学的変化を引き起こす主要因ともなる「生存状態での拘束」である。この 2 項目に基づく、人間と動物との相互関係は表 3 のように整理できる。

このうち、複数世代にわたる所有意識を持たず、生存状態での拘束もない I - a 段階は、狩猟段階に位置づけられるものであり、この中には、無差別的狩猟や選択的狩猟の他、群棲動物群への追跡を伴う狩猟といったセミ・ドメスティケーションのプレ段階も含まれる。

同じく、複数世代にわたる所有意識を持たない I - b 段階は、親からはぐれた野生動物の仔を一代限りで飼養する例などが含まれる。この段階では、基本構造においては I - a 段階と差異がないが、生存状態での拘束という人為的介入が単発的にせよ認められる点で、松井 (1989、1997) の定義する「セミ・ドメスティケーション」の一形態に含まれるものと理解できる。ただし、I - b 段階での動物飼養はあくまでも個体レベルにとどまるものであるため、このような単発的な個体の拘束が仮に断続的に続けられたとしても、II 段階における人間と動物との複数世代にわたる相互関係とは、明瞭に区別されるべきである。なお、I - b 段階で拘束された特定個体は、野生段階よりは人に馴れる性質が強化されるものとみられ、さらに、限定された人的環境下に置かれることによって、飼育第一代であって

表3 人間と動物との相互関係

<p>I 複数世代に対する所有意識なし 【対象動物＝資源】</p> <p>(a) 生存状態での拘束なし</p> <p>(b) 生存状態での拘束あり 一代限りの拘束でも、生物学的変化を生じる場合がある</p>	セ ミ ・ ド メ ス テ イ ケ イ シ ヨ ン
<p>II 複数世代に対する所有意識あり 【対象動物＝資本】 個体識別の必要性が生じる</p> <p>(a) 生存状態での拘束なし 生物学的変化を伴わない 対象動物に合わせて人間が移動する必要が生じる場合がある</p> <p>(b) 生存状態での拘束あり 生物学的変化を伴う 利用内容や技法が規格化され、文化として伝承される</p>	

も形態的に変化の生じる場合のあることが知られている（註 12）。しかし、種内の個体差や性別差を考慮すれば、特定個体に起こった僅かな形態的变化を考古資料に見出し得る可能性は低い。むしろ、最終的な取り扱われ方の特異性から、この段階にあった個体の抽出を試みるべきであろう。ただし、一時的な生存状態での拘束の後、狩猟された同種個体と同様の取り扱いがなされたとすれば、I - a 段階と I - b 段階との区別は、考古学的にはより困難なものとなる。

II 段階は、複数世代にわたる所有意識を有している点で、I 段階とは意識上に大きな隔りがある。このうち、生存状態での拘束を伴わない II - a 段階の事例としては、註 1 に示したラップによるトナカイ飼養を挙げることができる。この事例における狩猟段階（I - a 段階）との主要な差異は、トナカイに対する「所有意識」や「資本」としての位置づけという意識レベルにある。所有意識は、所有個体を識別する必要性を生じさせるが、ラップでは耳の一部の切り取りをもって（Ingold 1976）、シベリアのサハ共和国では角の一部の切り取りをもって（高倉 1997）標識とすることが知られるように、この種の痕跡が考古資料に留まる可能性は低い。さらに、この段階では、生存状態での拘束が行われないため、人間による介入の程度が狩猟段階（I - a 段階）と同様に低く、前節で示した家畜化の傍証となる考古資料のうち、(a)、(b)、(d)、(e)、(h)、(i) の項目では野生動物との差異が見出せないものとみられる。このように、II - a 段階では、物質資料にその痕跡が反映されない場合が大半であるといえるが、拘束せずに所有意識を維持していくためには、動物側の動きに人間側がある程度合わせていくことが必要となる。そのため、対象動物に合わせた生活の場の選定や生活様式の採用という観点から、この段階の存在を考古学的に類推することは可能であろう。

II - b 段階は、複数世代にわたる所有意識があり、かつそれを生存した状態で拘束している段階を指す。なお、「拘束」には、自発的に人間の周囲に集まるといった低次のレベル

から、柵による囲い込みや係留による高次のレベルまでを含む。この段階では、限定された人的環境下に対象動物が複数世代にわたり置かれるため、先に見たいずれの段階よりも動物側に大きな生物学的変化を生じさせることになる。特に、用途に応じた好ましい特性を選択的に残していこうとする意識の発生以降は、間引きや去勢、野生動物との交配の制限という生殖管理の深化を導き、野生動物との生物学的差異をより一層顕在化させることになる。人間側からしても、用途に応じた最適な利用方法の模索と追求によって、飼養内容の規格化が進み、それが一つの文化として伝承されることにより、生業や文化活動における狩猟段階との差異がより明瞭になる。このように、II - b 段階では、人間側による介入の程度が高次になればなるほど、人間側と動物側の双方に狩猟段階とは異なる様相が表れ、それが考古資料に強く反映されることになる。

以上の検討から明らかなように、考古資料において、狩猟段階との明瞭な差異が生じ、家畜化過程にあるとの認定が容易になるのは、一般に、人間側からの介入の程度が一定程度以上に達した段階、すなわち「複数世代にわたる所有意識が発生し、生存状態での拘束がなされ、生殖管理や利用内容にある程度の規則性が生じ始めて以降の段階」と理解できる。これは、本節で提示した人間と動物との相互関係におけるII - b 段階に属するものである。本研究でも、この段階の家畜化についての検討が中心になるとみられるが、動物の特殊な取り扱い例や生活体系などの検討を通じて、I - b 段階やII - a 段階に属する事例の抽出についても積極的に試みていく必要がある。また、仮に考古学的に家畜化の証拠が見出し得ない場合でも、より低次の人為的介入を伴うセミ・ドメスティケーションの過程が潜在する可能性を考慮すべきであろう。なお、介入の程度や詳細については、考古資料からの類推が困難な場合が多いとみられるため、これについては可能な場合についてのみ行うこととする。

北東アジア沿岸の海獣狩猟文化において、これまでに飼養の可能性が指摘されたことのあるイヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマについては、「飼養」、「飼育」、「半飼育」といった用語が、飼養の定義や多様性の検証なしに用いられてきた感が強く、同文化における動物飼養の検討が立ち遅れる要因ともなっている。本研究では、これら4種の動物について、考古資料に基づく利用内容から飼養の可能性について検討し、飼養されたとみなせる種については、本章で示した指標に照らし、飼養段階の把握を試みることにする。

註

- (1) ラップが飼養するトナカイは、放し飼いにされ、自力で餌を探し、捕食者から身を守る。ラップがトナカイを捕獲する際には狩猟民と変わらない追跡を要するが、トナカイに対する所有意識があるため、セミ・ドメスティケーションの概念に含まれるという(松井 1989)
- (2) 本研究の対象地域である北東アジアの沿岸部は、マードック氏(Murdock 1968)が *Man the Hunter* の中で狩猟・採集民を検討する際に例外として除外した「定住的な漁撈民」の分布す

- る地域にあたる。テスタール氏 (1995) [1982] はこの「例外」とされた社会を論じるにあたって、当該地域も取り上げ、狩猟採集経済で定住化が成し得たのは、生態学的な富に加え、生業や余剰生産物の保存に対する技術的発展が背景にあったためであると述べている。
- (3) 松井氏は『セミ・ドメスティケーション』(1989) の中で、ユーラシアの西と東に、まったく相反する動物 (家畜) と植物 (栽培) に対する働きかけをする 2 つの文化圏を想定したオードリー・カール氏 (Haudoricourt) の研究を紹介している。同氏による論考 *Ecologie et agriculture asiatiques. La pensee, 198. pp.131-132.* は 1978 年に提出されたものである。筆者は未見である。
- (4) 1873 年に英国で結成されたザ・ケンネル・クラブの認定した犬種数。米国ケンネル・クラブの認定した犬種は 150 種、日本ケンネル・クラブの認定した犬種は 172 種である。ベルギーに本部のある国際蓄犬連盟は 200 以上もの犬種を認定している (アンガス 2002)。なお、認定されていない犬種を合わせると、その数は 400 以上にも上るといふ (フォーグル 1996[1995])。
- (5) オオカミのような共生関係の強い動物は、人間の定住的な居住地近くの隔離された環境に引き寄せられ易く、そのような場では、人間の直接的な介入がなくとも急激な形態変化が生じるという (Tchernov・Horwitz1991)。
- (6) ローマ帝国の属州であった Pannonia (現在のハンガリー、クロアチアとヴォイヴォディナにまたがる Danube 川の南と西を占めた古代の地域) に位置する村。
- (7) Ucko and Dimbleby(ed.) (1969)、Bökönyi (1969, 1974)、Jarman and Wilkinson (1972)、Brothwell (1975)、野澤・西田 (1981)、Olsen (1981)、ゾイナー (1983) [1963]、アイザック (1985) [1970]、Davis (1987)、Clutton-Brock(eds.) (1989)、Meadow (1989)、クラットン・ブロック (1989) [1981]、谷 (1995, 1997)、ジェイムズ (1997) [1994] など、多数の関連書籍や論考がある。このうち、ベケーニー氏 (Bökönyi1969) は、animal keeping と animal breeding を区別し、前者を後者の原始段階と位置づけるとともに、前者では一品種のみで、形態が原始的で野生種に比べて小型であるのに対し、後者では、多様な品種の存在やサイズの多様化、生産性の増加がみられることを指摘している。
- (8) 古 mtDNA 分析は、イノシシ類の家畜化の検討の際に用いられることが多い。日本列島におけるイノシシ類の家畜化については、大陸からの家畜ブタの移入による説 (直良 1937、西本 1989 ほか) と、列島内の野生種を家畜化したとする説 (金子・牛沢 1980) とに分かれる。古 mtDNA 分析によって、日本で出土したイノシシ類の遺存体が大陸産の家畜ブタと遺伝的に近縁であることが証明されれば、イノシシ類が大陸から持ち込まれたことが示唆され、前者の移入説の傍証となる。ただし、この分析では、分析対象とする塩基配列の領域の選定によって異なる結論が導き出される可能性のあることや、母から子へ組み換えなしに伝え続けられる古 mtDNA を用いているために男系の遺伝が反映されないという欠点もある。
- (9) イノシシ類について、野生段階と飼養段階では、餌が異なる (前者では堅果類や草類、小動物主体であるのに対して、後者では人間の食糧残滓や排泄物主体になる) との仮説に立脚し、炭素・窒素の安定同位体分析による食性の違いに基づいて飼養を証明しようとする分析方法で

ある。

(10)ペイン氏 (Payne1971) は、狩猟民が生存にとって十分な動物資源を未来にも得られると確信している場合には、「文化相的 emic」・「非経済的 extra-economic」な文脈に限ってそれらを資本とみなし得るとしたが、「経済的 economic」にはみなせないことを指摘している。

(11)所有意識の有無が、狩猟と牧畜とを分けると見る見解もある (Clutton-Brock1989)。

(12)野生動物を拘束すると、飼育第一代であっても頭骨の短縮が認められるとの報告がある (正田 1987)。